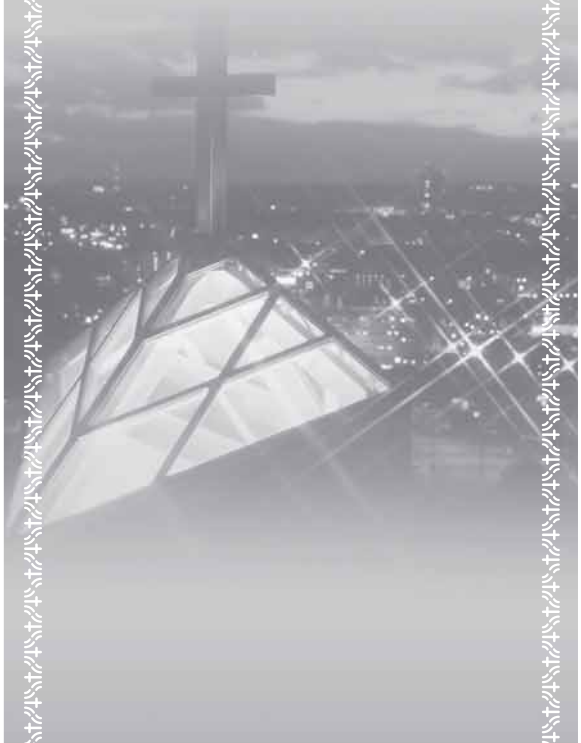
TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY

大学礼拝

WORSHIP SERVICE



2012年

サマーカレッジ
秋季特別伝道礼拝特集号

CHAPEL NEWS

第122号

巻頭言

「生き方」

宗教部長
佐々木　哲夫

> イエスはお答えになった。『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある。」
>
> マタイによる福音書　四章四節

右の聖書箇所は、イエス・キリストがサタンに対して応答している場面です。よく見ると「…と書いてある」とあります。旧約聖書を引用しているのです。サタンは、模倣するかのように、直後の場面で、旧約聖書の言葉を引用して語りかけます。両者とも、旧約聖書を熟知し、旧約聖書を前提にしているのです（マタイ四章一～十一節）。

ところで、パンか神の言葉かという問題になると、「衣食足りて礼節を知る」のように、パンを優先する理解があります。また、生き甲斐ということを考慮し、特に「パンだけ」の「だけ」という部分否定の表現に着目し、パンと神の言葉の両方が同等に重要であるとする理解もあります。では、イエス・キリストとサタンは、当該箇所をどのように理解していたのでしょうか。私たちも、引用箇所の申命記八章を参照しつつ考えたいと思います。

出エジプトにおける荒野での出来事でした。空腹になったイスラエルの民が、奴隷として生活していたエジプトの肉鍋とパンを懐かしんでモーセに不満をぶつけたのです。それに応じた神は、朝にマナを、夕にウズラを与え、彼らが食するパンと肉としたのです。その時に語られた言葉が『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』（申命記八章三節）でした。意外なことに、この言葉は、空腹を癒された人々に語られたのです。食べて満たされていた民に、優先すべきは、パンではなく神の言葉であることを体験的に知らせたのです。

後に、イエス・キリストは、同じことを自分の言葉で弟子たちに語っています。「『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。…あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる」（六章三一～三三節）。神の言葉で生きるとは、空腹になる生き方ではなく、必要なものを与えてくれる神に信頼して生きる生き方なのです。

「聖書は現代に語り出す」

テモテの手紙2、3章16節～17節

日本聖書協会総主事

渡部　信

「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です。こうして、神に仕える人はどのような善い業をも行うことができるように、十分整えられるのです」

私は紹介にもありましたように、財団法人・日本聖書協会の働きをしております。日本聖書協会とは今から二三七年前の一八七五年、明治八年に海外の聖書協会、スコットランド、英国、アメリカ聖書協会の来日によって開始されました。そして一八八七年に文語訳聖書を皮切りに、一九五五年には口語訳聖書、一九八七年には新共同訳聖書を翻訳・出版し、日本のキリスト教会やミッションスクール、そして一般書店を通して、多くの日本人に読まれております。東北学院で現在、用いている新共同訳聖書は、発行部数がこの二五年間で二〇〇万冊を超えました。これは現在発行されている日本語の本の中で発行部数一番のベストセラーになっています。

それではどうして聖書がこのように世界のベストセラーなのでしょう。ただ聖書は古い記事だから読まれているのではなく、先ほど聖書の個所を読みましたように、「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です」とあるように、まず、ユダヤ人の間で最初から暗記するために読まれたということです。そしてその聖書は世界共通語であったギリシャ語にも翻訳され、ユダヤ人以外でも読むことができました。

それではそんなに貴重な聖書が昔から皆に読まれていたので、たくさん聖書が出回ったのかと申しますと、それが意外にこの二百年、三百年前のことでして、まず、グーテンベルグの印刷機が発明される前は、全部、聖書は手書きでした。その上、ラテン語に翻訳されたものがカトリック教会で長い間使われるようになり、一部の学者しか読むことができないようになっていたのです。これが中世までのキリスト教です。

ところが二千年のミレニアムの時、アメリカの雑誌タイム誌が行った「過去千年の間に最も重要な出来事は何か」というアンケート調査で分かるように、過去千年の間で最も重要な出来事は「グーテンベルクの印刷機の発明で、誰でも聖書が読めるようになった」ことが一位に選ばれました。しかもギリシャ語やラテン語ではなく、一六世紀にプロテスタント教会の誕生によってラテン語以外の英語、ドイツ語、そしてフランス語、次々に各国語に翻訳され、そこから大衆が聖書を学ぶようになり、神学校と大学が創設され、教育では人文科学が盛んになり、経済においては資本主義が生まれ、政治では民主主義が起こされ、この目覚ましい文明の近代化はここわずか数百年間前、聖書が誰でも読めるようになったことに起因するのです。

そしてこの私も今から三六年前、高校生の時に、この聖書を読んだ時に、聖書が私に語り出しました。聖書は正直なところ初めはとても読みづらく、知らない言葉がたくさん出て来ますし、内容が断片的で、決してなめらかではありません。しかし「読書百篇にして意自ら通じる」という中国のことわざのように何度も何度も読むと聖書の方から語り出して来るから不思議なのです。聖書はそれを「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ」とありますように、読む時に神の霊に導かれると、そこに神の力が備わって来て、単なる教えや戒めではなく、私たちの誤りを正し、義に導くところの命の御言葉になって行くのです。

◆渡部　信　氏

一九四八（昭和二三）年に生まれる。一九七五（昭和五〇）年青山学院大学文学部神学科卒業後、一九七六（昭和五一）年西南学院大学神学部専攻科卒業（組織神学専攻論文）。一九七七（昭和五二）年ダラス・バプテスト大学修了。一九七八（昭和五三）年クリスウェル・ビブリカルインスティテュート修了。一九八一（昭和五六）年ベイラー大学大学院宗教学部卒業（宗教哲学専攻論文）。

日本バプテスト連盟鹿児島キリスト教会、水戸バプテスト教会を経て、一九九八年（平成一〇年）財団法人日本聖書協会副総主事就任。一九九九（平成十一）年同協会総主事に就任し現在に至る。他に聖書協会世界連盟アジア太平洋地域理事会理事、聖書協会政界連盟世界理事会理事、学校法人青山学院評議員、日本キリスト教協議会（NCC-J）常任常議員を務める。

渡部先生には、十月二日（火）に泉キャンパス、三日には土樋キャンパス（朝）の礼拝をご担当いただきました。

「大地回復の希望」

イザヤ第65章17節～25節

財団法人日本聖書協会
島先　克臣

預言者はバビロンに捕われて苦しむ民に希望の言葉を語った。主が再びエルサレムに戻り、イスラエルを復興するときには、万物が新たになり、平和と豊かさが回復される、と。それは新天新地としか表現できないような新しくされた世界。

この回復の希望は新約聖書にも引き継がれる。イエスは世の終わりにおける神の国の完成を語り、パウロは肉体の復活と被造物全体の滅びからの解放を述べ、ペトロは「義の宿る新しい天と新しい地とを待ち望んでいる」と告白する。黙示録の最後、すなわち聖書の最後には、その日、天の都が下ってきて、神が地上で私たちとともにおられ、私たちの「目の涙をことごとく拭い取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない」と書かれている。

神がこの世界を造り、そこを正しく治めるために人を造った、それは極めてよかった、と言って始まる聖書。確かに人間は罪のゆえに、この地上を歪んだ形でしか治めていない。戦争、抑圧、貧富の差、そして原発などによる環境破壊。しかし今、イエス・キリストは私たちの罪を赦し、私たちを通して、この地上を回復しようとされている。神が正しく治める領域（神の国）を広げようとされている。そしてキリストが再び来る時に、それが完成する。極めてよかった世界が、最終的にはさらによい世界として完成する。この希望の言葉をもって聖書は閉じられているのだ。

その事を聖書から知った内村鑑三は一九〇四年にこう書いている。

われら、キリストと共に再びこの世に来る時は、このやぶれたる、濫用されたる地にくるのではない。悪人の貪欲を充たすために剥（は）がれたる山の林は再び初代の鬱蒼（うっそう）に帰り、貴人（きじん）の狂想を満たすために狩り尽くされたる鳥と獣とは再び原始（はじめ）の繁栄に復し、こずえには、数限りなき小鳥は猟師に驚かされずしてさえずり、流れには群なす小魚（こざかな）は漁夫（ぎょふ）の網目（あみめ）を恐れずして、おどる。万草、路傍（ろぼう）に色を競（きそ）い、喬木（きょうぼく）、森に高きを争（あらそ）い、河水（かすい）は増すも、岸を越えて民を悩まさず、池水（ちすい）は、かわくことあるも、渓水（けいすい）常に絶ゆることなくして、地は旱魃（かんばつ）を忘る。われらは、かくのごとき地に再び臨み来るのである。

皆さんはこの大学で大切なことを学んでおられる。その学びは色々な形で皆さんの将来の働きの土台となる。その働きとモノ作り・生産かも知れない、流通、サービス業、教育、政治、文学、芸術、音楽かもしれない、今の家庭と社会を支える家事、将来を育む育児かもしれない。あるいは、弱者を助け、放射能の危険を減らすことかもしれない。それがどんなことであれ、この日本を少しでもよいところとするようにと、創造者は皆さん一人一人に命をあたえておられる。愛を注いでおられる。そして皆さんのすることは、確かにごく小さな貢献かもしれない、挫折感を持つことのほうが多いかもしれない。しかし、創造者は、その小さな貢献を「よくやった」と褒めてくださる。褒めるだけでなく、それを来るべき日に、地上ですばらしいものに完成してくださるのだ。

キリストがもう一度来て、この世界を回復する。その希望を心の奥底に灯して一日一日を大切に生きていっていただきたいと切に願う。

◆島先　克臣　氏

一九五四（昭和二九）年に生まれる。一九七八（昭和五三）年立教大学文学部英米文学科卒業後、一九八一（昭和五六）年聖書神学舎卒業。一九九六（平成八）年米国ゴードン・コンウェル神学校旧約学修士修了。一九九九（平成十一）年英国チェルトナム・グロースター大学博士課程（ヘブライ語言語学）修了。一九八一（昭和五六）年日本福音自由教会牧師に就任。一九八九年（平成一年）には同教会派遣宣教師としてフィリピンへ。二〇〇〇（平成十二）年国際センド宣教団宣教師としてアジア神学大学に勤務。二〇〇四（平成一六）より財団法人日本聖書協会に勤務し現在に至る。

島先先生には、十月三日（水）に多賀城キャンパス、土樋キャンパス（夜）の礼拝をご担当いただきました。

自然に親しみ、聖書に聞き、讃美した三日間

【第三八回サマー・カレッジ報告】

大学宗教主任　野村　信

第三八回目となるサマー・カレッジは、予定通り、八月六日から八日まで蔵王ロイヤルホテルで天気にも恵まれて盛会裏に終了した。今回の主題は、「人間・大地・自然」（天地創造なる神）を掲げて、初日に土樋キャンパスの八号館押川記念ホールで開会礼拝を捧げた後、本学の環境建設工学科教授の石川雅美先生の講演Ⅰをお伺いすることから始まった。東日本大震災を踏まえて、いかに私たちの身近な所で、生活の基盤を整えるか、土木工学の働きやインフラを構成する基盤について分かり易く、また感銘深いお話をお伺いすることができた。

ボランティア・ステーションの活動の様子や働きについてセンターで解説を聞いた後に、ホテルへ移動した。お盆前とあって宿泊客が多い中でも、よく準備されていて快適な宿泊となった。夕食後は恒例の親睦会でなごやかな時を過ごし、その後、讃美歌やゴスペルフォークを歌う一時を過ごした。宗教部長佐々木哲夫先生の夕べの祈りをもって第一日目が終了した。

二日目は、朝の祈りの後に、「人間・大地・自然」と題して私が講演Ⅱを担当した。世界が神の手によって創られ、何よりも人間が神を認識し、讃美する特権を与えられたことを感謝し、喜び、各自が与えられた「生」を存分に生きることが大切である、と語った。とかく気分的に凹み、無気力、空しさが広がる現代に、もう一度多くの恵みを与えられていることを覚えて、それぞれ自分の道を力強く進んでいく大切さを確認した。

この後、四つのグループに分かれて、学生同士で講演や主題について自由な語り合いの時をもった。日頃ゆっくりと互いに膝を交えて話をすることが少ない中で、貴重な意見交換、交流の時であった。続いて早めの昼食をとった後、近くにある酪農センターに出掛けて、しばし牧畜の様子や、実際に家畜たちに触れるという体験の時をもった。羊やヤギ、牛なども、私たちと同じ命を与えられた一匹一匹大切な存在であることを改めて感じる時であった。

午後三時から毎年恒例のソフトボールを行い、老いも若きも、男女も問わず二つのチームに分かれて、しばし競技に熱中した。自然の中で、汗を流して走り回り、空腹で夕食会場へ移動した。

夕食後は、大学オルガニストの今井奈緒子先生の特別参加により、ポータブルのオルガンを使って讃美歌の説明と歌唱指導を頂いた。讃美歌第一編、第二編、讃美歌二二の特色や相異などの興味深い話を伺いながら、普段よりも大きい声を出して歌うことが出来た。この日はいささか疲れもあり、最後に講義室で車座に腰を下ろして輪になり、北　博先生の導きの中で、しばし祈り、心を沈める時をもった。盛り沢山の二日目が終わった。

最終の三日目は、朝の祈りの後に、大学宗教主任の出村みや子先生による「ピーターラビットと自然保護」と題する講演Ⅲを伺った。スライドで映画を鑑賞し、その中に時々見受けられる聖書のストーリーを探した。多く発見した人には賞が授与され、みな夢中で聞き、見つめ、楽しむ時を過ごした。この後、学生たちの発表を聞いた。今回学んだことや自分の意見を発表してもらい、それぞれ感想を語る良い締めくくりとなった。

来年、またここでの再会を願いつつ、満足の行く楽しい三日間の予定を消化し、濃緑の山々を後にして仙台へ帰途についた。

自然災害と人間

【サマー・カレッジ第一回　講演主旨】

工学部　環境建設工学科
石川　雅美　先生

昨年の三月に発生した東日本大震災の際には、電気、ガス、水道など、様々なものが長期間にわたってストップし、突如として不便な生活を強いられることとなりました。また、道路や鉄道が不通になり移動が困難になっただけでなく、物流が止ったため食料品店ではそれまで当たり前のように食品であふれていた棚が信じられないほどにカラになって、食事にさえことを欠く日々が何日も続きました。昨年に起こった震災では、このような苦しい日々を過ごさざるを得なかった訳ですが、その一方で、これまで私たちの生活を支えていた電気や水道そして交通網の大切さを改めて実感された方も多かったことと思います。

私たちが文明的（civilization）な生活する上で不可欠な電気や水、通信、流通を支える道路、鉄道などのライフラインを建設し、これらを支える仕事をしているのが土木技術者です。例えば一番身近なところでは、水道水を確保するためにダムを造り、飲料に適する水にするため浄水場を日々管理して、水道水を家庭まで配管して供給したり、また、トイレの排水を下水処理場を通して環境に影響を与えないように浄化して川や海に流すことなどです。他にも、道路を造る、発電所を建設する、鉄塔を建てる、電車の線路を敷設する、港や空港を作るなど、生産や生活基盤形成する構造物（インフラストラクチャと言います）を建設し、これらを管理するのが土木工学（Civil Engineering: 市民のための工学）の役割です。すなわち、土木とは、市民の文明的な暮らしのために人間らしい環境を整えていく仕事です。

ただ、残念なことに「土木」という言葉にあまりいいイメージを持っておられない方もいらっしゃると思います。一時マスコミで報道されていたように、「談合」や建設会社と政治家との不正な結びつきなど、また身近なところでは工事による騒音や交通渋滞など、とかく負のイメージが強調されているように思います。しかしながら、ほとんどの土木技術者は日々技術の研鑽に励み、社会に貢献するという高い志をもって仕事をしているということを多くの方々に知っていただきたいというのが、今回の「サマーカレッジ」での講演の趣旨です。

実は私も十八年間、土木技術者として建設会社で働いてきました。その間、常に「社会の役に立つ」ということを意識してきたつもりです。もちろん、かつての仲間たちもそのような意識を持っていました。余談ですが、私が働いていた会社の給湯室には「水の一滴は土木技術の血の一滴」という標語が貼られていました。後半の「酒の一滴は…」の部分はおまけですが、この標語は水や電気の大切さを強調するとともに、技術者として人々の生活を支える仕事に励むことを忘れないようにするためであったように思います。

さて、現在の私たちの便利な生活を支える社会資本は、明治時代にその整備が始められました。明治政府は、まず港湾と鉄道の建設に重点をおきました。東北地方は、特に重要視されていました。一八七二（明治五）年に新橋～横浜間にはじめて鉄道が開通し、わずかその十五年後の一八八七（明治二十二）年に東京～仙台間まで開通しています。東海道線の新橋～神戸間が開通したのは、仙台に二年あまり遅れること一八八九年です。ちなみに明治十九年に東北学院大学の前身である仙台神学校が創立されています。

明治から昭和の初期にかけて、広井勇（秋田港や小樽港の築港に従事、内村鑑三や新渡戸稲造と札幌農学校にて同級であった）や青山士（荒川放水路、大河津分水路を建設）、八田興一（台湾の烏山頭ダムを建設、いまも台湾の人たちから敬愛されている技術者）など多くの土木技術者が活躍し、我が国の社会資本は急速に整備されていきました。しかしながらその時代は、誰もが土木技術者になれる訳ではなく、高い志を持った選ばれた人だけがなれたのです。中でも青山士は、「私利私欲のためではなく広く後世の人類の為になるような仕事をしなければならない」と語っています。今もなお先達の教えは受け継がれており、土木学会では、土木技術者の使命として、（1）人々の命を守る、（2）より安全な社会をつくる、（3）より便利な社会をつくる、（4）倫理を重んじる、を掲げています。

今回の東日本大震災は、土木技術者たちの高い志と使命が発揮された場でもありました。国土交通省によって立案された「くしの歯作戦」と名をうたれた救援ルートを確保する方針は、国道4号線を軸に沿岸部へとつながる十六ルートを選定して、これを集中的に「啓開（道路や橋の障害物を取り除いて、道を切り開くこと）」することでした。三月一二日にはガレキに埋もれた十一のルートの通行を確保し、三月一八日までには、主要道路の九七％通行可能になりました。国土交通省を中心とした応急復旧は、目覚ましい早さで進み、被災された多くの方々を救いました。その陰にはトップの素早い決断と、国土交通省の職員や地元建設会社の方々の不眠不休の働きがありました。今も復興への取り組みは続いていますが、技術者たちの汗と努力の一端をご記憶いただければと思います。

各キャンパスのメッセージ

Izumi

泉キャンパス
大学宗教主任
野村　信

長い夏が終わって、今年も実りの秋がやってきました。秋の良さが今年は特にしみじみと感じられます。収穫の秋です。皆さんの勉学や大学生活での今年の実りの手ごたえはいかがでしょうか。大江健三郎さんの本の中に、「老木であっても、青々とした葉をつけ、美しい花をつける」という主旨の言葉があるのを見て、年齢に相違なく、若木も老木も、すなわち人は誰でも良い働きと実りを得ることが出来ると励まされています。

聖書にも「流れのほとりに植えられた木、時が巡り来れば実を結び、葉もしおれることがない」（詩編第一篇三節、エレミヤ書第十七章八節）とあります。多くの実りのなかでも、真の実りを得ることが大切だと改めて教えられます。それは思索と祈りと日々の努力の積み重ねによって得られるものでしょう。引き続き、良い大学生活を送り、大学礼拝や様々な活動から学び続けてください。

Tagajo

多賀城キャンパス
大学宗教主任
北　博

今年は全国的に記録的な猛暑で、九月に入っても一向に涼しくなりませんでしたが、やっと秋らしくなってきました。やがて木々が色づき始め、見事な紅葉を見ることが出来るでしょう。つい昨年の大災害が夢のようにも感じられる今日この頃ですが、今もなお多くの方々が仮設住宅に住み、また精神的経済的重圧に苦しんでいることは、決して忘れてはなりません。更に目を世界に転じると、地震などの自然災害で多くの人々が嘆き、苦しんでいます。また、シリアでは内戦で毎日多くの市民が殺されています。

私達は、このような世界にあって、自分のことばかりでなく、苦しんでいる多くの人々のことも気にかけるべきではないでしょうか。でも、一体私達に何が出来るのでしょう。人の役に立つために必要なものは、他人を思いやる心、それを生かす専門的な知識と技術、そして幅広い教養です。大学生活でそのすべてを磨いて下さい。

Touchitoi

土樋キャンパス
大学宗教主任
佐藤　司郎

今年の私の「キリスト教学」の担当は、一年生二クラス、三年生一クラスである。それぞれのクラスで私の場合「チャペル・レポート」の提出をお願いし、それを評価に反映させるようにしている。前期もほとんどの人が出してくださった。レポート用紙一、二枚だが、丁寧に見ている。短い説教でも的確に要約し、感想をつけた、すぐれたものもすくなくない。複数回出す人も多く、五回以上出す人も毎年クラスに数人はいるのではないだろうか。

「キリスト教学」の授業とチャペルの礼拝は、いわば理論と実践の関係、車の両輪である。講義を聞いただけでは分からないところもある。大学の礼拝は、特別のものをのぞいて簡素なものだが、それでもキリスト教の本来の場所がどういうところか、少しは感じ取っていただけるであろう。チャペルの礼拝を大切にし、他では決して学ぶことのできない真理に触れていただきたいと思う。

◆クリスマス礼拝のご案内

★第二十四回泉キャンパスクリスマス
十二月七日（金）十八時三〇分～
泉キャンパス礼拝堂
第一部
礼　拝
説教者：石巻山城町教会
関川 祐一郎 牧師
第二部
クリスマスコンサート
クリスマス・メドレー演奏、聖歌隊合唱、みんなで歌おう、キャンドルサービス、他

★大学クリスマス
泉キャンパス：十二月十三日（木）
十時二五分～
土樋キャンパス：十二月十三日（木）
十六時三〇分～
多賀城キャンパス：十二月十四日（金）
十時二五分～
説教者：キリスト教教育同盟　主事
磯貝 暁成 氏
オラトリオ「メサイア」合唱

★第六十三回公開東北学院クリスマス
十二月十四日（金）十八時～
説教者：横手教会
小松 理之 牧師
オラトリオ「メサイア」合唱

編集後記

楽しかったサマーカレッジ、実りの秋にふさわしい特別伝道礼拝の講演など、今夏以後の活動の様子を特集しました。執筆に協力してくださった方々に感謝します。学生のみなさんは、これから冬に向けてそれぞれが充実した日を過ごし、良いクリスマスのシーズンを迎えてください。（N）

二〇一二年十一月　東北学院大学宗教部
〒九八〇－八五一一
仙台市青葉区土樋一丁目三番一号